

# 西尾末廣とその時代

## ——戦前の労働運動、無産運動の指導者——

梅澤 昇平

### Suehiro Nishio and His Age

#### ——A Leader of the Prewar Labour Movement and Proletarian Movement——

UMEZAWA, Shohei

#### Summary

Suehiro Nishio was a highly influential leader of the prewar labour movement and proletarian party movement. He was also established as a postwar leader due to his consistent resistance to the wartime Imperial Rule Assistance Association and Patriotic Industrial Associations.

#### 要旨

戦前の労働運動、無産政党運動の指導者として西尾末廣の存在は極めて大きい。戦時中に大政翼賛会運動ならびに産業報国会運動に最後まで抵抗したことが、戦後の指導者への道に直結する。

#### キーワード

社会民衆党 (Socialist People's Party)  
労働総同盟 (Japan Confederation of Labour)  
日本労農党 (Japan Labour-Farmer Party)  
社会大衆党 (Socialist Masses Party)

## はじめに

戦後のいわゆる「民主化」の中で、政治の世界では、日本社会党の結成、片山内閣の誕生が起こり、労働運動では総同盟の再生を中心に、世の中が一変した。これはGHQの影響力もさることながら、戦前、戦中の無産運動、労働運動の蓄積を抜きにありえない。

この戦前、戦中の労働運動、無産政党運動から戦後の政治運動を通観する上で、西尾末廣の存在は大きい。共産主義者などからは最大の敵として罵倒されつづけた。それぐらい、戦前の労働運動、無産運動のリーダーとして活躍したといえる。戦前の労働運動では「西の西尾、東の松岡」といわれ、政治活動では第一回普選からの国会議員で当選15回を数えた。戦後の日本社会党、民社党の結成、片山内閣の成立などで文字通り主役を演じた。彼について書かれたものは、江上照彦による伝記や、芳賀綏の評伝をはじめ既にいくつかある<sup>(1)</sup>。ここでは、彼が生きた時代をどう読むか、特に戦争の時代をどう読むか、戦前の労働運動での活動をどう見るか、また「社民」と「日労」の歴史的関係をどう見るか、などを中心に、より掘り下げたい。

## 1. 無産政党時代の西尾

無産政党時代をどうみたらいいのだろうか。大正が終わるとほぼ同じく社会民衆党などいわゆる無産政党が、普通選挙実施を目前にして一斉にできた。以来、戦時体制まで続く。「合法無産政党」の寿命は13,4年である。現在の民主党が平成10年誕生だから、それに匹敵する。決して長くない。西尾は、社会民衆党7年、社会大衆党7年で、最後は「勤労国民党」を作ろうとして潰された。

戦前の西尾の政治活動については、彼の自著<sup>(2)</sup>もあり、語りつくされているので、概観するに止めたい。

彼は昭和3年の第一回普選で当選した無産政党の先駆的存在である。党首ではなかったが、社会民衆党の大幹部であり、社会大衆党を経て政治家として活躍した。

中でも著名なのは、二つの除名事件である。第一は、昭和13年、近衛内閣で、国家総動員法案が提案されたとき、西尾は社会大衆党を代表して本会議で質問し、近衛総理のリーダーシップを求め「ヒットラーのように、ムッソリーニのように、スターリンのように」と口走ってしまった。資本主義経済を規制するこの法案を苦々しく思っていた政友、民政の与党に付け込まれ国会を除名された。また昭和15年には、斉藤隆夫のいわゆる肅軍演説で斉藤が国会除名処分を受けた時、西尾ら社会大衆党の中の社民系系の議員は反発し、西尾らは社大党から除名された。その後、翼賛選挙や産業報国会など軍国主義の高まりの中で、西尾らは最後まで抵抗した。

後述するが、社会民衆党が昭和7年に日労党系と合同して社会大衆党をつくりファッショ勢力を排したが、日労系は軍部に接近し、麻生書記長が主導権を握って党を変質させた。この時期、戦時色がいよいよ強まり、西尾、安部磯雄らの社民系は肩身の狭い立場に追いやられた。

転機となったのは、昭和9年のいわゆる陸軍パンフレット事件であろう。陸軍統制派が軍の政治介入の必要性を言い出したパンフレットを作成した。保守政党は反発したが、麻生書記長は評価し、軍部との提携を主張した事件である。「日本の国情においては、資本主義打倒の社会改革において軍隊と無産階級の合理的結合を、必然ならしめている」とした。この動きに反発が起こった。「元来、社大党は、旧無産各党の寄り合い世帯だったが、麻生のこのような動きは、旧社民系系の安部磯雄、西尾末広や、下部に勢力を占める労農派の鈴木茂三郎、黒田寿男等から非難された」、しかし翌年の党大会では「中央執行委員長安部磯雄、書記長兼会計麻生久以下の幹部を選出して終わったが、こうして麻生、亀井らの親軍派が党の主流を占めることになった」<sup>(3)</sup>

という。もう少し引用する。「このような社大党の方向転換は、書記長麻生久を中心に、浅沼稻次郎、平野学、亀井貫一郎ら、主として旧日労系の人びとによって推進されたものだった」「この頃その指導の実権は、麻生書記長以下の旧日労系がにぎり、安部（磯雄）委員長や、西尾末広、片山哲、鈴木文治らの旧社民党系の人びとは、ほとんど重要な党議からはずされていた」という。この対立は斎藤除名問題で破裂した。「斎藤議員の懲罰については、委員長安部磯雄をはじめ、片山哲、鈴木文治、西尾末広らの旧社民党派が反対し、書記長麻生久以下、亀井貫一郎、三輪寿壮、河上丈太郎、浅沼稻次郎らの旧日労党派が多数の力で動議提出を決定してしまった」<sup>(4)</sup>という。これで社大党は割れる。

この間、西尾は5年間、議席がなく、総同盟の労働運動に専念している。中村勝範は社会大衆党時代の西尾について以下のように書いている。「西尾はそのなか（社会大衆党の常任執行委員引用者）にいない。社会大衆党時代の西尾は、同党を動かす幹部ではない。この時代には党中枢部に寄りつけず、またときには疎外されていたこともあった」<sup>(5)</sup>という。

## 2.労働運動と西尾

西尾の労働運動における存在は半端ではない。しかし「労働運動史における西尾末広の足跡には、今日まで十分な検討と評価が与えられてきたとは思われない」<sup>(6)</sup>といわれる。

彼は、かつては「西の西尾、東の松岡」と呼ばれた総同盟の大幹部である。彼は旋盤工として出発したいわば叩き上げの労働運動家である。最初は、鈴木文治の率いる総同盟に反発し、労働者自身による労働組合をめざし関西で職工組合期成同志会を作っている。その後、インテリの力を借りる必要性を感じ総同盟に入る。彼は大争議に進んで関わり、成果を上げた。松岡駒吉と並ぶ指導者になった。大河内一男は『暗い谷間の時代の労働運動』で以下のように書いている。少々長いが、まとまっている。

「松岡に対して西尾末広は、細かい経理事務で組合を強化するというよりも、争議を買って出て、いわば腹芸で解決しようとする点でずば抜けたカンと能力をもっていたことは住友鑄鋼所の場合を見てもわかる。彼はどちらかというと清濁併せのむという性格であったが、それでも終始松岡と一緒に行動した。西尾は『命を懸ける』という、そして会社側は『君の顔はつぶすようなことはしない』という、こうした双方の側の腹芸で多くの争議が妥結しており、また組合の離合集散も結末がつけられているが、西尾はいつも頑固な松岡を助けて、よく危機を切り抜けている。こうした腹芸による問題の処理は、労使間の近代的パーゲニングとはおよそ縁遠いものであり、いかにも日本的であるが、この点は西尾にしてできた芸当であり、その点で彼もまた松岡同様多くの誤解を受ける立場におかれた」<sup>(7)</sup>。

これは労使交渉による妥協を当然とするいわゆる労働組合主義の立場であり、労働組合が認められない時代に、これを単純に“腹芸”というのは階級闘争主義の立場にくみするものと言われても仕方ないだろう。

彼が労働運動でいい意味でも悪い意味でも歴史に名を残しているものの一番は総同盟で容共派を思い切って一掃したことであろう。

総同盟には様々な思想を持った運動家が入り込んだ。最初は、サンジカリズムである。直接行動をとるグループが一世を風靡した。これでは労働運動が公認されることはない。そこで労働組合主義者と容共派は反サンジカリズムで手を組んで、彼らを締め出した。次に問題になったのは指導権奪取を画策する共産主義者の台頭である。大正14年4月の総同盟第二回中央委員会でとうとう爆発した。鈴木会長不在のため、西尾主事が会長代理として裁き、手が付けられなかった共産主義派、当時の言葉で「ボル」つまりボルシェビキ派をバツサリ切り捨てた。これが有名な総同盟の第一次分裂である。彼も、いわば差し違えて、主事を辞任し、中央委員会も総辞職を決め解散した。以後、左派からは「ダラ幹」というレッテルを張られトコトン批判攻撃された。「[松岡、西尾らは]労働組合に地盤を有する組合または政治ゴロの親分、ダラ幹の元締」<sup>(8)</sup>とののしられた。この結果、総同盟は25組合が除名され、残留派は50組合と大変な組織分裂であった。しかし共産党を排除し、総同盟はシロアリを駆除できたのだ。

鈴木文治会長ではこのような決断はできたかどうか、怪しい。鈴木は後に次のように語っている。「労働総同盟の第一次分裂は、其の経過は甚だ複雑であるが、其の原因は極めて簡単明瞭である。即ち総同盟幹部の気づかない間に、共産党の先端分子が総同盟の有力会員を引入れ、更に其の手引によって細胞を植え付け、其の上外部の急進諸組合を総同盟の組織内に誘入し、此等の勢力を打って一丸として、あはよくば総同盟の乗っ取りを策し、少なくとも之を攪乱して其の一角を奪取せんとする策謀の結果に外ならない。これは会長としての私の重大な手落ちである」<sup>(9)</sup>と。

戦前の労働運動における西尾の行動を分析したものに、千本秀樹論文がある。労働運動指導者としての西尾の行動を検証し、「評価」している。そうした実証的な論文は管見するに他に見当たらないので、少々引用したい。

「1920年代後半以降の西尾末廣だけを見て、かれを右派指導者と位置づけるとすれば、日本労働組合運動史において、かれが労働組合の建設者として大きな役割をはたしたとの意義を見落としてしまうだろう」、「友愛会が日本労働総同盟へと発展してゆく過程なのだが、この課題にもっとも積極的にとりくんだのは西尾末廣であった。かれは友愛会大阪連合会を、全国の労働運動のなかでも量的、質的に傑出した組織にそだてあげ、文字通り友愛会の先頭にたたせたのである。」

「労働組合運動の実践のなかでこれだけのものをつかみとり、指導に生かしていった西尾を、わたしは高く評価したいのである。」

「西尾としては、ここまで育ててきた組織を、官憲による弾圧によって破壊されたくないという執着もあっただろう。以後、特に治安維持法制定ののち、西尾の思想と行動は、右傾化というよりも、現実に応じて組織を維持し発展させる方向をとりつづけるのである」

次いでいえば、千本は、西尾は共産党から執拗に勧誘されていたという。「共産党としてはぜひとも西尾が入党することを望んでいたようだ。…ソ連国内の実情をみて、西尾は共産主義に対する批判的感情を持ちはじめていた」<sup>(10)</sup>。この優れたオルガナイザーを取り込みたいというのは、けだし当然だ。

戦時中の労働運動と西尾について、戦後、同盟会長を務めた天池清次は以下のように証言して

いる。

「とにかく総同盟は、左派の連中に言わせれば右派、ダラ幹という悪口を言われていたけれども、総同盟が解散する時点に立って考えてみると、労働戦線統一の最左翼に立っているのが総同盟だった。あと中立的な者や、左にいる者はみんな産業報国会のほうに行っていた。…『総同盟精神は死なず』…その時の松岡さん、西尾さんにそういう解散の時の姿勢があったから、戦後すぐに立ち上げることができた」<sup>(11)</sup>という。

この姿勢があったからこそ、戦後の労働運動を、また社会主義運動をリードできたのである。

### 3. 西尾の個性

西尾の個性については、前述の芳賀綏が優れた論評<sup>(12)</sup>をしており、それを超えるものは見当たらない。そこで、ここでは一瞥に止める。

第一は、緻密さである。西尾の原点は、旋盤工である。いい加減なことは認めない。それと彼が探偵小説を愛読していて、まず材料を集め、その上でじっくり結論を出すという思考方法を持つと本人が語っていることがつながる。

ただし、戦前の労働運動について大河内が「腹芸」が持ち味といったことと、どう結び付くのか。年齢を重ね変質したのか。民社党時代に警咳に接していた筆者には「腹芸」論には違和感がある。

第二は、第一と関連性があるが、経験主義者で、観念的ではなかったことである。アナボルといわれた当時の左翼思想に毒されなかった。彼のことを「ソロバン」を持った指導者という評があるのは<sup>(13)</sup>、そうした意味であろう。利害得失や妥協点を十分探り、教条的でなかった。これには「関西」という風土があるようだ。西尾は自分のことを“ぜい六”だといっている。“ぜい六”とは広辞苑によれば、<sup>でっち</sup>丁稚、あるいは江戸っ子が上方の人を卑しめていう語である。西尾は「大阪はなんといっても、ぜい六というか、ど根性というか、浮いたことでなく実利的に地についたことをやる。…東京へ行くと、労働運動の間でも、とかく議論が多いんだ。その議論も…抽象論や観念論が多い」<sup>(14)</sup>という。

この考え方は、マルクス主義の観念論を拒絶したイギリスの経験主義に酷似しているのではなからうか。関嘉彦は「演繹的なマルクスの理論が、経験主義的なイギリス人の中で拒絶反応を起こした」<sup>(15)</sup>といっている。

第三は、責任感の強さと度胸のとてつもない良さである。「百折不撓」が彼が揮毫する言葉であった。彼の武勇伝は半端でない。まず労働運動である。大正10年といえば彼は30歳。大阪電燈争議で、西尾は関西の大親分の家に単身で乗り込む羽目になったが、彼は十数人の親分衆を相手に、自分は、幡随院長兵衛のように弱きを助け強きを挫く任侠の世界と同じだ、という主旨を述べ、堂々と引き揚げたという伝説がある<sup>(16)</sup>。戦後も、2・1スト直前に西尾は労働組合幹部数十人に取り囲まれ「なぜストに反対するのか」と迫られたが、彼は「駄目だ」と言い切り、そばにいた荒畑寒村がその度胸の良さに驚いたと述べている<sup>(17)</sup>。

第四は、彼の確信のもととは何かである。日本における無産政党史は、キリスト教の人道主義と深くかかわっている。明治34年の社会民主党結成に立ち会った6人のうち幸徳を除く5人が

キリスト教信者であったことは象徴的である。友愛会、総同盟を指導した鈴木文治、松岡駒吉はいずれもキリスト教の熱心な信者である。社会民衆党の安部磯雄、片山哲も同じだ。これは偶然ではないだろう。しかし西尾は違う。彼は勉強家で、経験主義者と自称している。その彼が辿り着いた確信は、英国型というか、西欧型の社会主義であろう。革命主義を否定し、議会主義に立つ社会主義である。ここで参考になるのは、西尾が最も感銘を受けた書物として河合栄治郎の「社会政策原理」を挙げているということだ<sup>(18)</sup>。これは意味が深い。日本における民主的社会主義の思想家と政治家がここで合流する。ちなみに両者は同じ年の生まれでもある。

この確信は、戦後の1951年結成の社会主義インター路線である。その反面が、手段を選ばぬ共産主義への根強い不信があったとみるべきであろう。

第五に挙げるのは、芳賀が鋭く指摘する「不器用な合理主義者」という性格である。芳賀は「西尾末広の政治生活は、憎まれ役として一貫してきた。...かれはもっぱら理性と意志の人であって、情の人というタイプではない。...はにかみが強く、調子のいい言動ができなかった」<sup>(19)</sup>という。人の性格は、表裏一体であるのは止むをえないだろう。

古い政治評論家の阿部眞之助の西尾論は端的だ。西尾は「いつも眉間を割られる敵役に廻されていた。どういふものか社会党は、昔から安部磯雄のような、平野水的<sup>ママ</sup>非政治家が、立役者に担がれてきた。右派の片山哲、河上丈太郎、左派の鈴木茂三郎、性格はそれぞれ違っても、非政治家的なることでは、共通していた。それでないと社会党ではシャッポにはなれない。西尾のような仕事師は、労働運動の場合と同じで、善意でしたことも、邪推で敵をつくる場合が多く、敵が足を引っ張って、なかなか山のてっぺんに登らせなかった」<sup>(20)</sup>と、見事な分析をする。“平野水的”というのは、多分、平野を蛇行する水のように、ぐずぐずただらだらとしていて、進路をなかなか決められないことだろうか。その上、彼らを“非政治家”と断定する。それに比べ、西尾は単刀直入の仕事師だった。そういう人物がいないと、どんな組織も動かない。しかし、やり手の仕事師は恨みも買う。

## 4.時代の背景

ここで西尾が生きた時代を見る必要がある。時代には時代の精神があり、いまの価値観で過去の時代を切り裁く傲慢を避けねばならない。

第一は、東京と大阪の関係である。現在は「大阪都構想」などが話題になっているように、大阪の地盤沈下は激しい。西尾が活躍した時代は違う。1930年の工業生産指数<sup>(21)</sup>をみると、次の順だ。大阪996、東京818、兵庫629、愛知448、神奈川295、福岡229。つまり大阪と兵庫という「阪神」はなんと東京の二倍である。西尾の活動基盤である阪神は経済、産業、労働運動で日本の中心であったのだ。だから西尾は「労働組合の本部は経済都市たる大阪に置くべきだ」<sup>(22)</sup>とすら主張している。

第二は、「インテリ」と労働者の関係である。いま大学進学率は同世代の50%程度である。しかし西尾が生きた時代は違う。まして東京帝大出はインテリの中のインテリ、庶民にとってはおそらく貴族みたいなまばゆい存在であったろう。「明治から大正の初期において、東京帝国大学出身の法学士が『車夫・馬丁・職工の類』として蔑視されていた労働者の救済に身を投じるとい

うことは、常識をこえた業であった」<sup>(23)</sup>とは、友愛会会長の鈴木文治を語ったものであるが、そのくらい衝撃的なことだったのだ。東大法科出はそのまま弁護士資格を得られた。そのインテリが東大新人会、あるいは早稲田の建設者同盟を作り、社会主義に目覚めて、前者は労働運動、後者は農民運動に流れ込んできた。いわば観念先行の彼らが参入してきて労働運動、農民運動は一挙に活性化したが、その反面、地道な運動はこれに掻き回され窮地に立ったといえよう。

第三は、労働運動と政治運動の垣根である。

いまは想像できないが、労働運動の指導者と無産運動の指導者が垣根なしに、入り乱れて活動をしたことである。そもそも、社民党は総同盟をバックにして誕生したし、日労党も総同盟の一部と日本農民組合の一部が合流したものである。普通選挙実施は、労働運動でも農民運動でも共通する運動目標であった。

西尾も、労働運動から出発し、昭和3年、無産政党员の先駆けとなったが、同6年には総同盟大阪連合会会長に、7年の総選挙で落選すると総同盟主事になり、11年の総選挙には総同盟の組織固めのため立候補しない。12年総選挙でカンバックしたものの、総同盟の主事に戻っている。

戦後も西尾は社会党結成を図り、その反面、労働運動の復活を盟友の松岡に託している。選挙で第一党になると、彼は官房長官、そして松岡は衆議院議長になる。西尾、松岡らにとって労働運動と政治運動の境目はまるで無いようである。二人だけのことでなく時代の特徴であろう。鈴木文治、河野密など、枚挙のいとまがない。

第四は、結社禁止とテロルである。

日本の社会運動は“天皇制国家”によって弾圧に次ぐ弾圧の歴史であった、というのは左翼、共産主義者の常套句である。しかし中村勝範がいうように、国体転覆を考える共産主義者に対してであり、一部の例外を除き、そういう事態は諸外国に比べなかった。「戦前の大衆運動は治安維持法により、完全に圧殺されていたかのごとく言うものがあり、そう考えている者がいるが、これもまた正しくない。治安維持法が主として対象にしたものは共産党と共産主義者である。したがって日本共産党は合法化されなかった。…非共産主義的な社会主義政党や労働組合は、同じ治安維持法下にありながら、その勢力を拡大しているのである」<sup>(24)</sup>。しかし戦前、結社の自由、言論の自由は大きく制約されていたことは紛れもない事実である。社会主義という用語はタブーとされ、上述した社会民主党は、二日後に結社禁止となり、戦時色が強まった昭和15年に斉藤肅軍演説で社大党を除名された西尾らが作ろうとした「勤労国民党」は即日禁止である。

もう一つは、テロルの時代でもあった。保守陣営でも、政友会の総裁は8人中、4人がテロルで倒されている。無産政党では山本宣治の斬殺事件などが著名である。社民系では13年に社大党党首の安部磯雄が襲われている。

第五は、思想戦である。労働組合による政治権力奪取をめざすいわゆるアナルコサンジカリズムが一時期、労働運動を席捲している。前述したように、総同盟も、最初にこの運動に振り回された。労働組合主義者はボルシェビズムつまり共産派と手を握り、これを排除したが、その後が、共産主義との戦いである。共産主義派を排除したのが、西尾らであり、前述した総同盟の第一次分裂である。その後が、マルクス主義に立つ日労系との主導権争いと、第二次分裂に繋がる。戦時色が強まる中で、国家社会主義派は台頭し、社民派は一時主導権を奪われる。更に日本主義派

も現れる。というように、戦前、戦中の無産運動、労働運動は、激しい思想戦を繰り広げた。

この思想戦の源流は、キリスト教人道主義と自由民権運動の二つといわれる。それは社会民主党の人的構成に象徴される。

## 5. 戦争の時代と西尾

第六は、戦争の時代である。戦争の時代と平時は違う。社会思想家の関嘉彦は、戦時中は軍の司政官として働き、戦後は遺族を歴訪して最後を報告したという。その彼が、戦後、イギリスのオックスフォード大学での日本研究のゼミナールでの国際会議に出席した際、イスラエルの教授がなぜ日本の知識人は反戦運動をしなかったのかという講演をした。関は挙手し、開戦までは戦争に反対したが、「自分は対米英戦争は日本にとって生か死かの戦いだと考えて自ら志願して戦地に赴いた、しかしそれは日本国民として当然ではないか、と反論した」<sup>(25)</sup>という。その場にいた朝日新聞の阪中友久記者はこの勇気ある発言に感銘して、以後、関が国会議員になってからも支援したという。

西尾は戦局とどう向き合ったのか。彼の発言を引用する。

「われわれも満州事変というものは、日本のように国土が狭く、人口のますます増加しているところでは、どこかに、この民族的なはげ口を求めなければならぬから必然性があったのじゃないかと考えていました」

「満州事変以来、大きな民族的な力として出てきたものに対して抵抗する力もないし、抵抗すれば殲滅される性質のものでした。なぜ、反戦の立場を打ち出し得なかったか、戦後いろいろといわれていますが、それは後からいえるものであって、当時の雰囲気はそんなものであったと思います」

「あの当時、反戦の立場を打ち出したら、たちまち国民の反対を受けて運動も何もできない。手足を拘束されるような状態になったと思います」<sup>(26)</sup>

西尾も苦悩していたのだ。彼は、これにどう立ち向かったか。社会大衆党が大きく方向転換したとき、西尾は議員でなかったり、社民系は中心から外されていたことは前述の通りである。

「私はその頃、今後労働組合の統一をどうしてもやらなければならないと考えたので、衆議院議員の立候補を断念したのです。5年のブランクである。「私は労働運動専一にやったものですから、それに代議士でもなかったんで、当時のことは記憶がありません」<sup>(27)</sup>とまでいうが、この発言には前後の年数など若干記憶違いがあるようだ。

そこで斉藤除名事件が発生し、これに反発した西尾らは日労系の執行部から社大党除名の処分を受けた。

この処分に西尾の盟友で総同盟を率いていた松岡駒吉はむしろ歓迎している。

「松岡はこの8名の除名をむしろ歓迎し、結社禁止になった新党・勤労国民党に多大な期待をかけたのであった。...当時の社会大衆党は、安部磯雄や松岡らの意に反し、主に日労系の人びとによって右へ右へと流されつつあり、このままではどうしようもないと考えられるにいたっていた」<sup>(28)</sup>と。

我々が、現代のようないわば平和慣れした時代に、安楽椅子に座って平和を論じるのとは訳が



違う。反戦、敗戦、内乱、革命という図式は共産主義の常套戦略である。コミンテルンの方針である。ロシア革命もそれである。

そう考えると、簡単ではない。社会民衆党は赤松克磨書記長らが、国家社会主義に走って分裂した。社会大衆党も麻生久書記長らが、“錦旗革命”といわれたように軍部の力を借りた革命をめざし転落した。

「[西尾は]当時の軍部に迎合した元無産党の議員らのなかでは異色のものであったが、西尾氏にとって、反共と反軍とは同じ根に発していた」<sup>(29)</sup>といったのは、朝日新聞の石川真澄だが、そうであろうか。むしろ反共、反ファシズムと呼ぶべきだろう。西尾の発言に、軍隊そのものを否定するものは見当たらない。西尾をはじめ社大党の候補者は総選挙で共通のスローガンを掲げて闘っている。「御国のためには血を流せ、仕事のためには汗流せ、人のためには涙流せ」というものである。政見公約で西尾は、「御国のためには血を流せ、とは総力戦の今日、国民の総てが前線将兵と同じ気構えにて、国家の為には一切を捧げて大東亜戦完遂に邁進することでありませう」<sup>(30)</sup>と解説している。

しかし、麻生らの動きを苦々しく思っていた西尾ら社民系はとうとう斎藤肅軍演説で切れ、社大党を除名された。翼賛選挙では大政翼賛会の非推薦候補として抵抗している。しかし国家総動員法案には社大党は積極的な姿勢を取っている。近現代史の伊藤隆は、そこに社会主義への道を見たからではないかという。

「社大党は国家総動員法を『社会主義の模型』ととらえていたのである」<sup>(31)</sup>と。

この法案とともに、いくつかの法案が出ている。電力国管法案、国民健保法案、職業紹介所国管法案などである。西尾らは、一連の法案を梃にして、これまでの財閥主導の変えようとしたのであろう。その評価は別だ。

西尾の盟友であった松岡駒吉は当時を以下のように語っている。「13年1月の第73通常国会に提出された電力国家管理法案、国民健康保険法案、農地調整法案、職業紹介所国管法案、国家総動員法案等の重要議案を見ても判る通り、これらの法案は勿論戦時体制を整えるためのものであったが、その底には従来の資本主義に対してある程度の統制を加えようとする意図も含まれていた。このことは多年われわれが主張して来たことと比較的近く、また社大党の政策とも類似していたので、近衛首相のそのような進歩的性格に対して幾分好意と期待を抱いていたことも事実である」<sup>(32)</sup>と。

左翼からの西尾への評価も予想外のところがある。法政大学の高橋彦博は「戦時体制下の社会民主主義者 帝国議会における西尾末広」<sup>(33)</sup>という論文を書いているが、結論は思った通りの批判だが、それに至るまでの論述は極めて高い評価に思える。そのさわりを少し引用する。

「戦時体制下の帝国議会における社会民主主義右派としての西尾の発言内容が、それ自体としては、戦時体制下の時点における日本の労働運動階級の労働条件や団結権を獲得する積極的な方向性を持つものとして展開されている事実をどのように評価するか」「西尾の積極的な提言の基底にあるのは、国家総動員体制に示される近衛内閣の新しい体制の構想が『資本主義ヲ改革』する方向性をもっているとする評価であった。この評価は、西尾個人のものではなく、社会大衆党がすでに」明らかにしているものだ。

西尾は、具体的に、労働国策審議会の設置、失業保険制度、労働時間制限などを提案してい

る。

また労働組合の解体につながる産業報国会運動にも、松岡らと最後まで抵抗している。かつて日本共産党は民社党との論争で、社大党の公約と西尾は翼賛会の推薦議員だと、これを批判中傷した。「赤旗号外」(1976年2月1日)で、「民社党の過去と現在」を特集し、「西尾氏は大政翼賛会の推薦議員になりました」と大書した。共産党流の用語でいえば、全くのデッチあげ。昭和17年のいわゆる翼賛選挙で「非推薦」の西尾はいじめられた。「この選挙で非推薦候補に対する当局の干渉弾圧が激しかったことは周知のことですが、私の場合は、たとえば政見の内容についても数回当局に呼びつけられ、その職歴を記載するについて、労働組合関係を削れという」<sup>(34)</sup>と無理難題を突き付けられている。現に、当時の選挙公約をみても、それが判る。西尾の選挙公約には、「今回の総選挙に於いて私は、翼賛政治体制協議会の推薦候補者の重困の中に、孤立無援、血みどろの悪戦苦闘を続けて居ります」<sup>(35)</sup>とある。

戦前はともかくとして、戦時中の日本共産党は弾圧で壊滅状態であった。天皇制打倒は、治安維持法の最高刑死刑に該当する。しかもコミンテルンのテーゼは、日本の平和のための戦争反対とは一言もいっていない。「ソヴィエトロシアを守れ」「共産中国を守れ」、そして日本を敗戦させ、天皇制を打倒せよ、である。これが、共産党がいう「戦争反対を唯一貫いた」政党的正体である。

まず戦時中に日本共産党は、組織としての実体を持たなかったというべきであろう。治安警察法、治安維持法で、「非合法」であり、表に出ることはできなかった。ほとんどの関係者は獄中である。現在でいえば、「革マル」「中核派」のような少数の秘密集団であろうか。

それに彼らの「反戦」なるものは、日本をぶち壊すための「反戦」であったといえる。有名な27年テーゼ<sup>(36)</sup>[コミンテルンから日本共産党へ出された1927年の指令]では、スローガンとして、「帝国主義戦争の危機に対する闘争」「支那革命から手を引け」「ソヴェート連邦の擁護」「君主制の廃止」などが並ぶ。もっとはっきりしているのが32年テーゼ[同1932年の指令]である。「日本帝国主義が支那に対する戦争によって志している所は、ソヴェート同盟攻撃のための進軍基地を作るために、支那におけるソヴェート運動を粉碎するために」であり、「かくして帝国主義戦争を内乱に転化し、ブルジョア=地主的天皇制の革命的顛覆を招来することの任務を課している。」として、行動スローガンとして、「帝国主義戦争反対、帝国主義戦争の内乱への転化。」「ブルジョア=地主的天皇制の転覆、労働者農民ソヴェート政府の樹立。」「ソヴェート同盟及び中国革命の擁護。」などが掲げられている。

しかし日本共産党は、これを日本国民の平和のため戦ったという。例えば「社会民衆党が侵略戦争協力に一路つきすすんでいったとき、日本共産党は、1932年からの中心的活動家への弾圧、集中的検挙というきわめて困難な状況のもとで侵略戦争に反対し、国民の政治的、経済的要求と利益を守って不屈なたたかいをつづけていました」<sup>(37)</sup>と。実体は「国民の要求や利益」のためというより「コミンテルンのため」「ソ連のため」の「不屈なたたかい」というべきであろう。

この点について厳しい指摘をしているのは中村勝範である。

「日本共産党は戦前、戦争に反対し、平和のためにたたかたと自ら称し日本国民の中にはどのように信じている者がいる。これは正しくない。日本共産党を公然と名乗った団体が反戦平和を大衆の前で公然と継続的に唱えたことはない。日本共産党は地下組織であり、公然たる活動は

おこなえなかったのみでなく、その党員は3.15事件[昭和3年3月15日の一斉検挙事件]前のピーク時においても日本全土に数百名を点在させていたにすぎない」<sup>(38)</sup>と。

事のついでに、荒畑寒村の弁も引用する。野坂参三帰国歓迎会のこと、主賓が「『戦争中、反戦運動をしたのは共産党だけだった』という意味の言葉があったが、そんな事実が果たしてあったかなかったか、海外に亡命していた野坂君よりも空襲下の日本に生活していた私たちの方がよく知っている」<sup>(39)</sup>と弁明している。

## 6. 「社民」と「日労」の違い

ここで、戦前の無産政党の系譜を一瞥しておきたい。というのも、戦前、戦後を通じて、社会主義者の流れ、人脈は連続として続いていた。西尾は社民系と分類されるが、まず全体の流れを見る。

普通選挙実施が決まると、その実現をめざしてきた社会主義運動、労働運動、農民運動などが、一斉に選挙への出馬、政党の結成に動いたのは当然である。その過程でいろんな人脈、党派が生まれる。

昭和3年の第一回普通選挙に向けて、大正15年は新党結成ラッシュとなった。まず、前年の14年に全国的単一无産政党の結成ということで「農民労働党」が結成されるが、ごった煮の寄り合い世帯ですぐ崩壊した。中に、共産主義者が流れ込んでいては所詮無理である。これはその後も続く。共産主義者は潜り込んで幹部を批判して主導権を奪う。鈴木茂三郎も「徳田球一の指導する日本共産党に対してあらゆる意味に於いて信をおくことができなかつたのである。…共産党の上手な戦術に乗せられて、とりこにされる虞がないではない」<sup>(40)</sup>と語っている。

翌15年に、「労働農民党」ができるが、共産派が主導権を取り、反共産の右派はまたしても出る。委員長も日本農民組合の杉山元治郎から大山郁夫に代わる。この合法政党に非合法の共産党は潜り込んだ。次に「日本農民党」が生まれる。日本農民組合が主力である。総同盟は「社会民衆党」を立ち上げる。階級政党でなく国民政党をめざした。ところが、ここで波乱が起きる。社会民衆党ができて4日後に、突然「日本労働党」が生まれた。総同盟の左派と日本農民組合の右派が合体してである。これで総同盟は分裂する。麻生、加藤ら12名が除名され、7000人が組織を割った。

「労農」「日農」「社民」「日労」という4つの流れは、戦後にまで続く。中村菊男・中村勝範は、この4グループは「穏健な『社会民主主義』と共産主義的要素の強い『マルクス主義』であり、この二つのエキスをうすめたり、カクテルにすることによって、いくつもの政党に分立していくのであった。」<sup>(41)</sup>と見る。

ここで「社民」と「日労」の違いについてまとめておく必要がある。

社会民衆党は、日本における社会民主主義（あるいは民主社会主義）の正統派といえる。しかしこれが嚆矢かどうかは異論がある。明治34年の「社会民主党」を嚆矢とする見方もある。この党を立ち上げた6人のうち幸徳秋水を除く5人は安部磯雄をはじめすべてキリスト教徒であり、その人道主義が背景にあった。この社会民主党の綱領は、北一輝にも大きな影響を与えた。しかし二日後には結社禁止処分を受け、事実上の活動はなかった。したがって、社民党を源流と見る

見方が有力となる。

社民党の特徴は、総同盟を基盤としながらも労働者階級の政党とせず、国民政党としたことであろう。綱領は、以下の三か条である。

- 一、吾等は勤労階級本位の政治経済制度を建設することを以て健全なる国民生活を樹立する所以と確信し之が実現を期す。
- 二、吾等は資本主義の生産並びに分配方法に健全なる阻害するものありと認め合法的手段に依て之が改革を期す。
- 三、吾等は特権階級を代表する既成政党並に社会進化の過程を無視する急進主義の政党を排す。

現代風に翻訳すれば、福祉国家の建設、議会主義、革命反対、ということになるうか。

後の三反主義につながる。すなわち、反資本主義、反共産主義、反ファッショである。

議長は安部磯雄、書記長は片山哲、という布陣で、西尾は賀川豊彦、鈴木文治、松岡駒吉、赤松克磨らとともに役員を務めた。

これに対して日労党はどうだったか。

日労党の最大の特徴は、その出自である。左翼陣営からは罵倒に近い評価だ。高橋彦博は「中間派日本労農党の場合、その結党経過は特異なものであった。一片の組合の決議、一つのグループにおける申し合わせに促されることもなく、麻生一人の決断によって新党結成への踏み切りがなされ、上からの組織作りが行われている」<sup>(42)</sup>と厳しい。

当事者の河野密もインタビューで本音を漏らしている。「麻生さんとか三宅正一さんとか、農民組合と労働組合との合作でした。ぼくは率直に言って、あの時分から安部磯雄先生がつくった社会民衆党というもの、ほんとうからするならばあれを助けてやるべきだ」<sup>(43)</sup>と。その彼が綱領を書いている。綱領の内容は社民党と大同小異で、合法手段によるとある。これは労農党も同じ。つまり当時は、「社会主義」という用語はタブーだった。

もう一人の当事者、西尾はどう見たか。『大衆と共に』で、3つの理由を挙げている。

「麻生君が総同盟に反撃を許すことになった原因について考えてみると、当時総同盟では松岡、西尾の労働者出身が勢力を得て、その指導者がインテリから労働者に移りつつあることに、不満があったようである。また思想的にも麻生君らは社会民主主義にはなりきれないものがあった。鉱夫組合の不振と会費未納問題も」<sup>(44)</sup>と。

この思想傾向について、河野は本音を語っている。

「[日労党は]背景をなす労働組合が寄り合い世帯であったために、たびたび混成軍の弱さを暴露し、常に小刻みの動揺を繰り返した。ことに左翼の労働農民党側からの攻勢は熾烈をきわめ、その防衛のために忙殺されざるをえなかった。...当時は、マルクシズムをもって思想の基調としたので、共産党もしくは共産党を正面から排撃するといえなかった」<sup>(45)</sup>。なんと、もろい集団か。

中村勝範はズバリ分析している。

「麻生は社会民衆党結成に力を注ぎながら、その結党を前に目標を別個の政党結成に転じたのは、麻生の私的欲望の率直なる表現によるものである。社会民衆党の大黒柱となる総同盟は、学歴小学校どまりの職工あがりであった松岡駒吉、西尾末廣がリーダーシップを確保していた。東京帝国大学出身の麻生久、三輪寿壮、棚橋小虎らは総同盟においても松岡、西尾の驥尾に付き、

無産政党においても同様に驥尾に付するのでは不愉快である」<sup>(46)</sup>と。

法政大学の増島宏の評価も厳しい。

「[日労党の]綱領、政策とも、ほとんど労働農民党と同じものであった。」「日労党は、その指導部の大部分は根本的には日和見主義の立場にたった。」「日労党は当時の無産階級運動のなかでの『動揺派』であり、中立的ムードに支えられた党派であった。」「<sup>(47)</sup>と。

芳賀綏は日労と社民を比較し、別の評価をしている。

「三宅[三宅正一]や日労の人々を語るのに、忘れてならぬものの一つは、かれらの胸中に燃えた熱烈壮大なロマンチズムである。日労は論理の人の集まりではなく、情念の人の集まりである。…思想的異分子と明確に一線を画し心を閉ざす社会民衆党系の求心的性格と対照的に、現状打破のためには八方に心を開き手を携えんとする遠心的性格が日労にはあった」<sup>(48)</sup>と。芳賀には「大正デモクラシーの残照 河上派の人々」という小論があり興味深い。「日労系は、育ちのいいインテリの集団であることを大きな特色としている。…この集団の中心人物たちに旧家、素封家の子弟などが多く、しかもかれらは若くしてすでに“名士”だった。…『われわれは親から金をもらって運動しとったんだが、西尾君や佐々木更三君は実際に労働しながらやとったんだから、えらい』という三宅正一の感想は、他の派閥の指導者たちと日労系グループの体質の違いを端的に物語っている」<sup>(49)</sup>と。

しかし大局的に見れば、日労系は、戦時中、安易に軍部と手を結び、政党政治、労働運動を解体させていった罪は余りにも重い。その背景にあるものは、マルクス主義に引きずられていった思想的あいまいさ、「統一」の看板しかない、あいまいな政治姿勢にあるのではないか。これは戦後の社会党の中でも変わらぬ体質であったといえるだろう。

ただし、芳賀も指摘するこのおらかな大衆受けする姿勢が、戦前最後の選挙で、社会大衆党の37議席までの躍進につながった面は否定できない。中村菊男は、麻生久書記長のリーダーシップがこの躍進の原動力であったと言い切る<sup>(50)</sup>。

社民と日労は、戦前は、社大党で一旦は統一したが、やはり上手くいかず、斉藤除名事件が転機となって、別れる。戦後も、日本社会党で「右派」を形成するが、民社党結党で決定的な分裂に終わった。

## むすびにかえて

西尾は芳賀がいみじくも指摘するように「憎まれ役」が多い。しかしそうした人物がいないと組織や国家はもたないだろう。彼は、観念よりも実益を追求し、戦前の苦しい時代に無産政党勢力というより議会政党勢力そして労働組合を守りために戦ったことは間違いない。その評価は、右か左か、観念か現実か、で大きく割れるのは仕方ないだろう。しかし戦前の堂々たる歩みがあったからこそ、戦後すぐ社会党結成、片山内閣誕生のリーダーシップをとるのを誰も妨げられなかったといえる。

注

- ( 1 ) 江上照彦『西尾末広伝』同刊行委員会、1984年、芳賀綏『威風堂々の指導者たち』清流出版、2008年、  
『指導者の条件』三修社、1980年などでの所論をさす。この他、中村勝範、遠藤欣之助、加藤日出男ら  
の西尾論がある。
- ( 2 ) 『大衆と共に』世界社、1951年、『政治手帖』時局研究会、1952年、『新党への道』論争社、1960年、  
『西尾末広の政治覚書』毎日新聞社、1968年、『私の履歴書3』日本経済新聞社、1957年など。
- ( 3 ) 大河内一男、松尾洋『日本労働組合物語・昭和』筑摩書房、1966年、p 296 297
- ( 4 ) 同上、p 358
- ( 5 ) 中村勝範「西尾末広」内田健三、中村勝範ら『日本政治の実力者たち』有斐閣、1981年、p59
- ( 6 ) 「現実主義に徹した運動家 西尾末広」労働史研究同人会『日本労働運動の先駆者たち』慶応通信、  
1985年、p199
- ( 7 ) 大河内一男『暗い谷間の労働運動 大正・昭和(戦前)』岩波新書、1976年、p39 40
- ( 8 ) 月刊社会党編集部『日本社会党の三十年( 1 )』(社会新報、1974年) p56によれば、共産党の「赤旗」  
第一号所収の「闘争の方針」にある。
- ( 9 ) 鈴木文治『労働運動二十年』総同盟50年史刊行委員会、1966年(復刻) p 345
- ( 10 ) 千本秀樹「日本労働総同盟の発展と若き日の西尾末広」(京大)人文学報48号、1980年3月、p26、p90  
91
- ( 11 ) 天池清次『労働運動の証言』日本労働会館、2002年、p40 43
- ( 12 ) 芳賀綏「不器用な合理主義者」(『指導者の条件』三修社、1980年、p16 34) など。
- ( 13 ) 上條愛一『労働運動夜話』一灯書房、1950年、p81 82
- ( 14 ) 後藤清一『ど根性こそ我が人生』読売新聞社、1974年、p174 177
- ( 15 ) 関嘉彦『民主社会主義への200年』一藝社、2007年、p393
- ( 16 ) 西尾『大衆と共に』p101 106
- ( 17 ) 荒畑寒村『寒村自伝』論争社、1961年、p562 563
- ( 18 ) 芳賀『威風堂々の指導者たち』p172
- ( 19 ) 同上、p18、30
- ( 20 ) 阿部眞之助「西尾末広論」『文藝春秋』1953年12月号
- ( 21 ) 戦前の関西圏の経済 <http://blogs.yahoo.co.jp/xhhfr149> (2011年7月12日アクセス)
- ( 22 ) 芳賀『威風堂々の指導者たち』p37
- ( 23 ) 「労働者に代わって天下に訴える 鈴木文治」『日本労働運動の先駆者たち』p106
- ( 24 ) 中村勝範「無産政党論」民主社会主義研究会議編『大系民主社会主義第2巻政治』文藝春秋社、1980年、  
p369
- ( 25 ) 関嘉彦『私と民主社会主義』日本図書刊行会、1998年、p181
- ( 26 ) 西尾『大衆と共に』p32、35 36
- ( 27 ) 同上、p32 33
- ( 28 ) 『松岡駒吉伝』同刊行会、1963年、p260
- ( 29 ) 石川真澄『人物戦後政治』岩波書店、1997年、p166
- ( 30 ) 『大東亜建設・代議士政見大観』都市情報社、1943年、p816
- ( 31 ) 伊藤隆『近衛新体制』中公新書、1983年、p75
- ( 32 ) 松岡駒吉「動乱期の労働運動」『別冊知性・秘められた昭和史』河出書房、1957年、p 320
- ( 33 ) 高橋彦博『現代政治と社会民主主義』法政大学出版局、1985年、p120 156
- ( 34 ) 西尾『新党への道』p44
- ( 35 ) 前掲『代議士政見大観』P817
- ( 36 ) 石堂清倫、山辺健太郎編『コミンテルン日本に関するテーゼ集』青木書店、1970年、27年テーゼ、32  
年テーゼを収録している。
- ( 37 ) 「赤旗」1976, 1, 26 (10版p2) 「民社 = その前身の歩んだ道 < 4 > 」

- (38) 中村勝範「無産政党史論」p369
- (39) 前掲『寒村自伝』p539
- (40) 鈴木茂三郎『ある社会主義者の半生』文藝春秋新社、1958年、p250、252
- (41) 中村菊男、中村勝範『日本社会主義政党史』経済往来社、1966年、p136
- (42) 高橋彦博『日本の社会民主主義政党』法政大学出版局、1977年、p126
- (43) 河野密『現代史を創る人々』毎日新聞社、1971年、p72 73
- (44) 西尾『大衆と共に』p25
- (45) 河野密『日本社会政党史』中央公論社、1960年、p86 87
- (46) 中村勝範「無産政党史論」p370 371
- (47) 増島宏「日本労農党の成立」法政大学『社会労働研究』第14号、1962年3月号、p33 37
- (48) 芳賀綏「巨人・三宅正一」『三宅正一の生涯』追悼刊行会、1983年、p497
- (49) 芳賀綏『現代政治の潮流』人間の科学社、1974年、p242
- (50) 中村菊男「社会大衆党の成立と発展」『民主社会主義の歴史と理論』中央公論社、1966年、p105